

## ■はじめに

4 月の校長会で、「ミネルヴァの鳥は黄昏に飛び立つ」という言葉を引用して、時代の変わり目を読んで新たな時代を切り拓く人材を育てることの重要性をお話ししました。実は、この話は次期学習指導要領改訂と関連付けています。



## ■「ミネルヴァの鳥」からもう一人

前回は、時代を切り拓く人材の一人として、マザーハウスの山口絵理子さんを紹介しましたが、山口さんの話をしながら、以前（平成 27 年 4 月教育長講話）皆さんにお話した ISAK（インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢）の創立者の小林りんさんのことを思い出していました。

小林さんは、自身の高校時代に、得意な教科のことを認めてくれず、どの教科もバランスよく力を伸ばせという進路指導に疑問を抱き、高校を中退しました。自分をきちんと評価してくれる学校を探して、カナダのインターナショナルスクールに留学します。

そこで発展途上国出身の留学生と出会い、恵まれない環境から苦勞して留学していることを知り、日本では誰でも教育を受けることができるが、世界にはそうではない国もあり、教育の機会は均等ではないことに気付きます。そして、恵まれた自分の現状に感謝し、将来は教育で恩返しをしたいと思うようになったそうです。このような思いから、大学では開発経済学を、大学院で教育学を学び、卒業後はユニセフでフィリピンの貧困層教育に携わります。仕事をする中で、彼女は、貧困層教育も大事だけれど社会の指導者層が変われば貧困が生まれる社会構造自体が大きく変わる可能性があると考えようになりました。そこで、日本に戻ったあと「社会に変革を起こせるようなチェンジメーカーを育てる教育が必要だ」と感じ、同じ志をもつ仲間と理想の学校づくりに奔走するようになります。私は、ちょうどその時期に、小林さんを訪ねて、その熱い思いを直接聞き、感銘をうけたことが強く印象に残っています。

小林さんはチェンジメーカーに必要な力として、「多様性の中で相手を尊重し、活かす力」「課題を発見し、解決していく力」「困難にも打ち勝つ力」を挙げています。前回紹介した山口絵理子さんは、まさしくそのような力をもった人物だと言えます。

今、山口さんや小林さんのような次の時代を切り拓いていく人が求められています。こうした人づくりの観点から次期学習指導要領を読んでほしいと思っています。

## ■時代の要請に合わせて変わる学習指導要領

現行の学習指導要領と次期学習指導要領の一番の違いは、後者が「インターナショナルスタンダード（国際的に認められた標準）」として、世界に通用する人材育成を目指しているところです。

昭和の高度経済成長期には早く、正確に、大量生産に適した人を育てる教育が求められ

ていました。しかし、時代が行き詰まり、知識偏重・詰め込み教育への批判が出てくると、学習指導要領において、1989年には変化への対応力の育成や学習過程などを重視した新しい学力観が出てきました。それが1998年の「生きる力」に結びつき、現在の学習指導要領に繋がっています。このように学習指導要領は、時代の変化に影響を受けながら、次の社会に対応できるように変わってきました。人工知能や情報通信技術の発達により、生活が大きく変わる予測困難な新しい社会において、日本の中だけで通用するような教育では国としても生き残っていくことができません。そうなれば個人の夢の実現も同時に消えてしまいます。今、子どもたちには世界に通用する力が求められているのです。

## ■世界に通用する力を育てるキャリア教育

世界に通用する力を子どもたちに身に付けさせるために、次期学習指導要領では右のように「育成すべき資質・能力の3つの柱」を示しています。

学力の3要素のうちの「主体的に学習に取り組む態度」を、次期学習指導要領では1つ目の柱に掲げ、「学びに向かう力・人間性等」として新たに示されています。これを受けて、私は、机上で学ぶ知識だけでなく、体験や社会との関わりの中で鍛えていく「困難に負けずにやり抜く力」、「我慢し継続

していく力」、「他者と折り合いを付ける力」、「リーダーシップ」、「チーム力」といった目に見えない力、いわゆる非認知能力を育成していくことが大切ではないかと考えています。

例えば、ISAKには課外活動に専念するプロジェクト・ウィークという取組があります。この取組は、生徒たちが身近な暮らしの中で出会ったテーマを課題に選び、プロジェクトと向き合う中でリーダーシップを身に付け、社会との関わりから未知の状況に対応していく力を鍛えます。奈良市にも同じような目的を持った取組があります。ジュニアインターンシップ（課題探究型職場体験学習）もその一例です。自分が追求したい課題に基づいて職場を探し、体験によって自らの課題を追求します。そして、その取組を通してわかったことをポスターセッションで発表し、その場で質問の受け答えをします。ただの体験で終わってしまうのではなく、社会と繋がっていくことや、自分が社会で何ができるのかを意識した取組です。先生方には、人生や社会と繋げながら学習させることを、全ての教科た領域で意識してほしいのです。それが、キャリア教育で大切な点だと思っています。

まずは、校長先生が、教育や一つ一つの取組の大きな目的・方向性を理解し、自分の言葉で現場の先生に伝えることが大切です。歴史に残る人づくりをしているという意識と気概を持って、日々の教育活動を行っていくようお願いします。

